新春対談　未来を信じる帯広 ～はじまりのはじまり～

乃南アサさんの著書『チーム・オベリベリ』には、私たちのまちの原点ともいうべき十勝・帯広の開拓が描かれています。乃南さんと一緒にこのまちのはじまりを振り返りながら、これからのまちづくりに想いをはせる貴重な機会となりました。

担当課　広報広聴課

晩成社との出会い

市長 乃南さんの『チーム・オベリベリ』を読ませていただきました。最初は、本の厚さに驚きましたが、３日で読み終えてしまうくらい非常に面白かったです。

乃南 ３日で！　それはありがとうございます。

市長 乃南さんは、いつ頃から十勝・帯広の開拓の歴史に関心を持たれたのでしょうか。

乃南 初めて帯広にお伺いしたのは、平成19年頃だと思います。当時、知床の開拓移民をテーマにした『地のはてから』という小説の取材でアイヌ民族について調べていて、帯広百年記念館の学芸員だった内田祐一さんをご紹介いただきました。取材で訪ねると、せっかくだからと館内を案内していただけて、そこで初めて見た落ちぶれはてた依田勉三の写真パネルがとても印象的でした。

内田さんに「晩成社の開拓の歴史は、日本の常識でしょうか？」とお伺いしたら「帯広では小学校から教えていますが、全国的には知られていないと思います」と聞いて、「では、書ける時がきたら私が書きたいから、その前にどなたかに書かれてしまわないよう、なるべく内緒にしてください」とお願いをしてしまいました。

市長 そんなお願いをしていたのですね。（笑）

乃南 内田さんは、冗談だと思って笑っていらっしゃったようでしたが、それがご縁で、その後もメールでいろいろとご相談したりしていました。機が熟し、やっと小説の取材にお伺いできたのが、10年後の平成29年になります。

依田勉三とチーム

市長 乃南さんは晩成社を「チーム」と捉え、本のタイトルにも使っていますね。

乃南 依田家は船会社や学校をつくるくらい裕福な家柄だったため、親族からだけでも潤沢な資金を集められましたが、それでも開拓は桁違いの予算規模です。別の資金調達が必要でした。

しかし、一緒に開拓地に移住した農民たちは字も読めないほどで、勉三が提案する会社組織の仕組みは理解できません。そのため、勉三は「黙って俺についてこい」としか言えず、自分の構想を思うように農民に伝えられなかった。

また、開拓の中心となる男性３人は、いずれも教養のある人々でしたが、豪農出身の勉三に対して、同志である鈴木銃太郎と渡辺勝は武家出身だったため、生まれ育った環境が違い、３人の意識に微妙なずれを生んでいたように思います。

市長 そうですね、小説の中でも農民との衝突や、銃太郎、勝との関係性など、コミュニケーションに苦労している勉三の姿が垣間見られました。

乃南 その上、勉三という人は「もっと丁寧に伝えれば…」と思うくらい、口下手で説明も苦手だったように思います。３人の見据えるものや望むものの違い、そして説明不足ゆえに、勉三の要求が理不尽に感じ、チームになりきれない。お互いにもっと理解し合えてさえいれば、「最強のチーム」になれるのに、記録を読んでいても農民たちが全然一致団結しなくて。（笑）

市長 まさに、うまくいかないビジネスの典型ですよね（笑）。やはり、共通の目標や目的に向かって、全員が同じ方向を向き、お互いにコミュニケーションをしっかり取ることがとても大切ですから。

乃南 本当にそうですね。彼らは、小屋一軒、建てる時でさえ、手伝いに来ると言って来なかったりしていました。心を一つにまとめることができなかったことが、失敗の原因だったのでしょう。

市長 でも、私がいいなと思うのは、このまちで開拓の祖といわれている人が、失敗を経験している点です。勉三の事業の多くは成功せず、最期は悔しい思いをして亡くなりましたが、志を高く持てば、必ず次につながる何かを残せる。失敗しても次に頑張って成功すれば良いと思います。その姿勢が今のこの地域の歴史や文化をつくってきたと思うと、これからも大切にしていきたいと感じています。本の中でも勉三は決してヒーローとして描かれてはいないですよね。

乃南 勉三は神様のように「拓聖（たくせい）」と呼ばれ、銅像も建ち、勲章も受けている。その上いい男で、全く非の打ちどころがない「孤高の人」としてヒーロー化されている資料が非常に多いことに気付きました。

でも、人間がそんなに完璧なはずはありません。勉三が優れた経営者の手腕を持っていたとしても、開拓という大事業を進めるには、実際に動く人間やサポートする人間、下で支える人間が必要です。仲間と「チーム」が組めなければ絶対にできなかった。その３人の絶妙な関係性を描きたいと思いました。

晩成社は「株式会社」

市長 十勝・帯広の開拓には、国の屯田兵でなく民間の開拓移民が挑戦したことは、よく知られていますが、本の中で勉三が配当や出来高を気にしながら、「株式会社」として開拓に取り組んでいたことに改めて気付かされ、とても新鮮でした。勉三は晩成社を率いて、初めからこの土地で「稼ぐ」ことを考えていたのですね。

乃南 そうですね。晩成社は今でいうベンチャー（新しいサービスやビジネスを展開する企業）ではないでしょうか。

市長 実は、市長になる前、投資会社に勤めていたため、本を読んだ時に「そうか、晩成社はベンチャー企業だったのか」と思って、乃南さんにも「晩成社はベンチャーですよね」と質問しようと思っていたら先に言われてしまって。（笑）

乃南 それはすみません。（笑）

晩成社と開拓移民

帯広の本格的な開拓は、明治16年５月に依田勉三率いる晩成社（明治15年１月、現在の静岡県松崎町で結成）一行27人が、下帯広村に入殖したことから始まります。

彼らは度重なる冷害、バッタやネズミによる食害など、苦難の開墾生活を送りながらも、牛肉やバターの生産など多様な事業に取り組み、十勝の開拓や産業に先駆的な足跡を残しました。

晩成社移民団

依田　勉三
晩成社を率い帯広市を開拓した。開墾に関わる業績から緑綬褒章を受章した。

鈴木　銃太郎
晩成社の幹部、渡辺カネの兄。アイヌ民族と親交を結んだほか、芽室の開墾にも着手した。

渡辺　勝（まさる）
晩成社の幹部。下帯広村の地で居を構え開墾に従事し、音更で牧場経営にも着手した。

渡辺　カネ
夫の勝とともに開墾に従事し、その傍らで私塾を開いて入殖者やアイヌ民族の子どもたちに読み書きを教え、晩年には帯広の歴史の語り部になった。

市長 市では、５年程前から若者の創業・起業を支援する「十勝・イノベーション・プログラム」に取り組んでいます。実は、この地域で仕事をつくるなら、「チーム」のほうがいいと思い、このプログラムでも４、５人でチームを組んで事業計画を練っていますが、面白いことに誰かが夢を語ると、それを応援する人がちゃんと現れる。毎年、80人程が参加して、今では総勢５００人程に。その彼らがこの本のタイトルを見たら…。

乃南 ビビっときますよね！「チーム」という点でも「起業」という点でも共通しているので。

市長 そう、ビビっとくると思います。夢の実現に向けて目標を持つだけでなく、事業計画をしっかり立てるベンチャーとしての視点を、十勝・帯広の開拓者が持っていたことに、非常にうれしい気持ちになりました。このまちの羅針盤になるような素晴らしいタイトルをつけていただいたと思っています。

乃南 そう言っていただけると光栄です。

主人公の渡辺カネの強さ

市長 物語の主人公の「渡辺カネ」も素晴らしい方ですよね。

乃南 ３人の男性は、とてもキャラクターが立っていますが、その人間臭さや個性をどう書こうかと思った時に、渡辺勝の妻であるカネが物語の座標軸になるのではないかと思いました。男たちはなにかと騒いではお酒を飲むばかりでしたが、女性のカネは現実的で地に足がついて、この地で勉三がいろいろな事業を行っていきたいと考えていることにも気付いていました。

　開拓に苦難が襲い掛かるにつれ、晩成社の人数も減っていきますが、なんとか最後までしがみついて生きてこられたのは、しっかりと「今」を見据えたカネの存在があったからのように思います。カネの視点から垣間見える勉三の弱さや人間臭さを表現したいと思いました。

市長 今まで十勝・帯広の人が思い描いていた「依田勉三」の姿とは違うかもしれません。

乃南 皆さんにお叱りを受けるのではと、ドキドキしています。（笑）

市長 そんなことはないです（笑）。とても勉三を身近に感じましたし、勉三の気持ちも伝わってきました。

乃南 『チーム・オベリベリ』では、女性の現実的な面と、男性の夢を追いながら突っ走っていく面の対比が描けたかなと思います。渡辺勝は奔走しているか、お酒を飲んでいるかの印象が強いかもしれませんが、物事への推進力や爆発力がすごくあります。一方で、やはりその重しになる人も必要で、その点、とても知恵のあるカネがいてよかったと思います。彼女の日記などを見ても無駄なことは一切記されていないので、本当に明治時代の強い女性だと感じました。

本当に大切なもの

市長 今、感染症の拡大で世界中が大変な思いをしています。カネも先の見えない場所に突然、連れて来られて不安をたくさん抱えていたと思いますが、彼女の生きざまには、普遍的な「大切なもの」がたくさんあるように感じます。

乃南 そうですね。カネの人生には、忍耐と苦労しかなかったように感じるかもしれません。でも、恐らく、そうした生活の中でも、我が子の成長や自分の教え子が学問を修めて立派になって帰って来るといった、日々のささやかな出来事に感謝と喜びを感じて生きていたのではないでしょうか。

　目の前の石をどけたあとに、次の石をどかすような努力を、彼女は帯広でずっとやり続けてきたのだと思います。先のことを考えても、目の前の石がなくならないことには、どうしようもないわけですから。私は、自分の仕事に没頭することや目の前のやるべきことをやることが、つらさを忘れるには一番だと思っています。夢を見ることでもお酒を飲むことでもありません。カネもそうだったのではないかと。

市長 はい。こうした非常時には、心が弱くなりがちですが、まずはそれぞれの役割や仕事をしっかり果たすことが大切だと思います。そして、家族やパートナー、友人などとチームとなってみんなで支え合いながら、将来に向かってしっかりと道をつくっていく。そんなことが大切な時代になってきていると感じています。

乃南 そうですね。本当に大変な時代ですが、できることをやるしかないですよね。

前を向いて生きる「まち」

市長 今、市では、将来のまちの姿を「あおあお　ひろびろ　いきいき　未来を信じる帯広」という言葉で表現し、まちづくりを進めています。ひらがな三つのシンプルな組み合わせで、私たちが大切にしてきて、これからも大切にしたいものを伝えられるのではないかと。そして「信じる」ことなら、誰もが心の中で、できることではないかと思い、「拓（ひら）く」などの強めの言葉は使いませんでした。

乃南 そうですね。信じているふりはすごく簡単ですが、本当に信じるということは責任を相手に押し付けないということです。よくドラマなどで「信じていたのに、バカ！」というセリフがありますが、それは、自分の都合のいいように信じていただけだと思います。カネたちは、バッタの襲来や早霜に畑が何度もやられてしまっても、天候やオベリベリの土のせいにはせず、いつか実る日が来ると信じて生きていきます。それが開拓者たちの強さだと思いますし、現代の私たちに一番欠けている弱さでもあるような気がしますね。

市長 そうですね。他人のせいにしてしまうと、何も生まれません。「未来を信じて前を向いて生きる」という思いに共感してくれる人がたくさんいるまちにしたいと思っています。

　最後に、乃南さんから市民の皆さんにメッセージをいただけますか。

乃南 帯広に来ると、タクシーに乗っているだけでも、運転手さんから地域の自慢話をよく伺います。帯広は地元愛の強い方が多く、とてもここに住んでいることを誇りに思っていらっしゃいますよね。

　また、東京の住宅街とは違い、家と家の間に塀が少ないのにも驚きました。そうした地元の誇りや、人と人の間に隔たりがない、おおらかさをこれからも大切にしていただきたいです。

市長 ありがとうございます。一人よがりではいけないですが、他の地域も見た上で「十勝・帯広はすごい」と、皆さんに共鳴してもらえたらうれしいです。

　私が感じている帯広のいいところは、底抜けに明るいところです。胆振東部地震では、帯広もブラックアウトを経験しましたが、その時、停電で冷蔵庫が使えなくなり、冷凍していた肉がもったいないからと、日中、あちこちの庭で焼き肉をしていたくらいです。（笑）

乃南 それは、いいですね。（笑）

市長 先ほど、失敗の話もしましたが、人生には困難な時もあります。問題は、それでもまた頑張れるか、そして、そんな相手に優しく声を掛けられるかだと思います。失敗に寛容で、人の気持ちを思いやれる地域であってほしいし、その上での底抜けの明るさであり続けてほしいと思います。

乃南 それは本当に大切なことだと思います。

　それから、私が帯広で一番、好きなものが「水」です。あまり外には知られていないかもしれませんが、居酒屋で普通に出していただいた水道水がおいしくてとても驚きました。ぜひ、これからも帯広ならではの資源や広大な自然を大切にしてほしいと思いますし、外から何度も訪ねたくなるような味わいのあるまちになっていただきたいです。

市長 はい、ありがとうございます。

　『チーム・オベリベリ』のように、仲間と助け合い、信念を持ちながら生きている、そんな生き方をする人たちがたくさんいるまちになれば、「あのまち、いいね」といろいろな人に共感・共鳴してもらえるのではないかと思います。

　受け継いできた「なくしてはいけないもの」をこれからも大切にしながら、外からの視点も取り入れて、十勝・帯広の新しい文化ができていくといいと思っています。

　これからも市民の皆さんとともに、乃南さんに何度も足を運んでいただけるようなまちを目指していきます。

乃南・市長 ありがとうございました。